

第4章 学習指導案におけるアンケート調査

1 アンケートの意義について

(1) 一般的なアンケートの意義

総務省によると、アンケート調査とは、調査対象の意見や行動を把握するため、特定の期間内に様々な調査方法で様式化した質問で回答を求め、データを集める調査方法である。アンケート調査の目的はそのアンケート調査の位置づけにより異なり、計画を策定していくうえで目的を明確化する必要がある。事業活動を継続的に改善する手法として PDCA サイクル (Plan : 計画, Do : 実行, Check : 評価, Act : 改善) があるが、アンケート調査が PDCA サイクルのどの段階に位置づけられるかを照らし合わせることで、アンケート調査の目的が定まる。

(2) 保健体育科学習指導案におけるアンケートの意義

上記の「調査対象」とは、生徒個人または集団となる。生徒個人または集団が保健体育の授業をどのように捉えているのか、またどのような特徴があるのかを把握するためにアンケートを取ることが意義となる。「調査方法」とは、一問一答や「はい」「いいえ」の二択式、複数から選ぶ選択形式や、生徒の意見を自由に聞く記述式など様々である。何を調査するのか、その目的に応じた形式が選択されるべきである。もちろん、アンケートを取ること自体が目的ではなく、調査後のPDCAサイクルが重要になってくる。今回は学習指導案作成のためのアンケート調査ということなので、「Plan : 計画」のための調査となる。

2 アンケート調査の実際

(1) 質問事項の内容

ここでは、観点ごとの実態把握に有用な項目についてまとめていく。

観点は「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つである。以下は、各観点において、どの単元にも当てはまる例である。

○知識・技能

- ・～（ルールなど）を知っている。
- ・～ができる。
- ・～をやっている。

○思考・判断・表現

- ・～を工夫することができる。
- ・～資料を参考にすることができる。
- ・～について教え合うことができる。
- ・～について自分の考えを相手に伝えることができる。
- ・～について皆の前で発表することができる。

○主体的に学習に取り組む態度

- ・保健体育の授業が好きである。

- ・運動は好きである。
（単元が）好きである。
- ・安全についての配慮ができる。

回答の仕方については3段階評価でもよいが、より実態を把握するためには5段階評価（よくあてはまる、まあまああてはまる、どちらでもない、あまりあてはまらない、全くあてはまらない、など）が望ましい。

(2)把握した内容の活用や留意事項

アンケート調査で把握した内容は、以下のことに活用できると考えられる。

- ①観点ごとの実態把握
- ②指導と評価の一体
- ③安全への配慮
- ④単元目標の設定
- ⑤場の工夫
- ⑥手立て
- ⑦個別の指導（配慮が必要な生徒、C評価にあたる生徒への手立て）
- ⑧グループ作りの手がかり

①観点ごとの実態把握

主に、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点となる。

「知識」は、単元や種目についての既習事項にあたる。

「技能」については、質問紙による調査であるため、実際の技能が優れているか否かを正確に把握することは難しい。自己評価が甘い生徒もいれば、厳しい生徒もいることを考慮しておくべきである。

「思考・判断・表現」については、既習内容や資料から、自他の課題解決にあてはまることを選ぶことができるか、文章や言葉にして表現できるかにあたる。

「主体的に学習に取り組む態度」については、保健体育科や体育実技について、また単元についての関心、意欲、態度についての内容となる。

②指導と評価の一体

観点ごとの実態把握をするメリットは、評価につながるということである。評価は指導した内容についての評価であり、当然指導していない内容は評価の対象とはならない。指導の要点を整理し、正しく評価するためにも指導内容に即したアンケート調査を行いたい。

③安全への配慮

体力の低下が課題となる現在、安全への配慮が優先事項となる。単元計画に無理がないか。調査で生徒の特徴を捉え、安全への配慮を万全に行って授業を実践していく必要がある。

④単元目標の設定

小学校での既習の学習経験には、学校ごとによって多少の差が生じる。対象が1年生の場合は特に既習内容を把握することは大切である。具体的には知識として習ってきたこと、技能としてできること、単元に対する意欲などにあたる。目の前の生徒、学習の場（条件）で、目標を達成するために最善の目標を設定したい。

⑤場の工夫

中学校ごとに施設の条件は違う。グラウンドや体育館の広さ、生徒の人数、教具の種類や数、ICT環境、指導者の体制など、まったく同じ条件などはあり得ない。だからこそ、生徒の実態を把握することで、目標を達成するための様々な場の工夫が考えられる。

⑥手立て

手立てとは、ここでは学習過程を指す。単元目標の達成にむけた学習過程を考えていく必要がある。学習課題に大きな飛躍がないか、進度は適切か、発問の適切なタイミングや方法はどうすればよいかなど、実態把握から予想されることはたくさんある。

⑦個別の指導（配慮が必要な生徒、「努力を要する」状況（C）と判断される生徒への手立て）

意欲とは別に、配慮が必要な生徒は必ず存在する。その生徒の特徴から、配慮事項は何か、どのような手段をとることができるかを探る。また、3段階評価のCにあたる生徒についても、あらかじめ取ることでできる手段を考察しておくことが大切である。

⑧グループ作りの手がかり

単元によっては、グループの編成を行うものがある。技能について同質集団か、若しくは異質集団がよいのか、発言力などの集団で発揮する力が求められるのか、意欲が低い集団ができていないかなど考慮する際には、実態把握が必ず必要となる。

3 その他の目的に応じた実態調査

(1)体育授

業を診断的・総括的に評価する

診断的評価（事前的評価）は、授業の開始前に授業の学習課題が生徒にとって適切であるかどうかの判断に使用する。総括的評価は授業が一段落した後、その授業の成果を把握するために行われる。これはシーデントップ（1986）や高橋（1981；1994）が主張する目標、すなわち、運動（技能）、目標、認識目標、社会的目標、情意目標の4つの目標に一致する授業評価

尺度（高田・岡澤ほか。2000）を開発した。「たのしむ（情意目標）」「できる（運動目標）」「まもる（社会的行動目標）」「まなぶ（認識目標）」の4因子（項目群）、各因子5項目、合計20項目で構成されている。目的は授業の改善となるが、診断的授業評価については指導案作成において、生徒の把握を十分に行うことができるものである。

(2) 体育授業を形成的に評価する

診断的・総括的評価に加えて、各時間の授業実践を形成的に評価し、当初の計画を修正し、個々の生徒の学びの実態を把握することは、授業の成果を高める上できわめて重要である。調査項目は「成果」「意欲関心」「学び方」「協力」の4次元9項目から成り立っている。この調査の主な目的は授業改善であり、指導案作成時には適さないと考える。

(3) 生徒の有能感をみる

生涯体育・スポーツの実践者の育成には運動に対する有能感を高めることが重要である。それゆえ、生徒の運動有能感の変化を測定し、その授業効果の検討を行うことが必要となってくる。運動有能感は、「身体的有能さの認知（自己の運動能力、技能に対する肯定的認知に関する項目）」「統制感（自己の努力や練習によって運動をどの程度コントロールできるかに関する項目）」「受容感（教師や仲間から受け入れられていると言う認知に関する項目）」で構成されており、合計12項目の質問からなる。運動有能感の調査では、上記、2アンケート調査の実際、（2）把握した内容についての、⑥手立て、⑦個別の指導、⑧グループ作りの手がかり、を考えるときに有効である。

4 まとめ

目標を達成するための手立てを考える際に、生徒の実態を把握することは必要であり、このことからアンケート調査による実態調査は指導案作成には不可欠であると考えられる。そのためにも、指導の手立てを考えてからアンケートを行うのではなく、アンケートを基に指導の手立てを考えることが求められる。

保健体育の授業に教科書はないが、目指す生徒の姿は全国同じである。しかし学習実践の環境は、生徒が習ってきたこと、できること、意欲、学習の場（広さ、形）等それぞれ異なっている。そこで、アンケートにより実態を把握することで、目の前の生徒、学習の場（条件）で、目標を達成するために最善の手立てを考えていくことが大切である。